

第八章 基地の変遷

一 歴史的発展の過程

通知

昭和十四年七月三日

福生村組合役場

軍事施設ニ関スル要談ノ為メ軍部ヨリ主務者
出張ノ上関係者ト協議致度旨通知有之候条左
記承知ノ上該時刻迄ニ相違ナク出頭相成度候

左記

一、協議場 福生小学校

二、日時 七月四日、午後四時

三、出場者 成ルベク本人

止ムヲ得ザル場合ハ代理人ヲ必ズ出席セシ

ムルコト

四、携行品 本人ノ印（認印ニテモ可）

当時、福生村の台地上は地理的に見て一般に利用し難い場所と思われていた。しかし、こうした場所こそ飛行場には好適であり、そこに目をつけたのが日本陸軍航空本部であった。そこで軍部はその主旨を福生村に令達した。これに従い福生村役場は要地の関係地主に上記のような通知状を発したのである。

この通知により関係の地主は召集され、昭和十四年七月四日、福生第一小学校に集り、土地買収に関し協議された。当日出席した地主は村内で笹本八十次郎外四二名、対外地主は東京大森区桐ヶ谷町一六〇番地鈴木晋一外四二名の合計八六名であった。

当時の国情から推察して、この会議において軍部の要求通り土地売渡しの承諾が行われたものと考えられる。従って、その結果軍部はただちに福生村長に次の土地価格調査の照会状を寄せてきた。

土地価格調査の件照会

昭和十四年七月四日

陸軍航空本部

第十課長 八木光三

福生熊川組合村長殿

軍事施設上参考ト致度ニ付別紙記載ノ地域ニ
対スル地価ヲ調査ノ上貴職ノ意見通報相煩度
追而本件ハ軍ノ秘密ニ属スルモノニ付御了知
相成度申添フ

土地売買価格評価調査

昭和十四年七月六日

所在地		地目		反当価格		摘要
所在	地	地	目	上	中	下
福生村	字	宅	地	円	円	円
武藏野	畑			七〇〇	六五〇	五五〇
日光街道	東	山	林	六五〇	六〇〇	五〇〇

これによって村では下記のような土地の価格を評価し報告した。

一方、村では土地の買収がいよいよ具体化するについて土地買収に関して委員の選定を行い、その結果笹本半左衛門・田村半十郎の二氏を決定、昭和十四年七月六日陸軍航空本部に報告した。

こうして土地の買収については進行し、これに並行して軍部は土地の測量を同年七月七日より向う一カ月間の予定で開始した。この際、測量班員六名が来村し宿泊して実務に当り、また測量用人夫は一日およそ三十人が使われた。

土地の売渡し価格は八月の初旬に至って決定し、同月土地の登記がなされ、ここに最初予定した要地が軍部に売渡されたのである。

その売渡された面積は町の北部一帯で、約二百五十ヘクタールの山林中約二百ヘクタールでここに日本陸軍航空整備学校が建設されたのである。その後軍事施設は年を追うに従い拡大され、太平洋戦争が苛烈になるにつれそれが一層顕著となった。

この頃から福生駅を中心として、本町・志茂・牛浜等の畑は急速に市街地化し、都市計画に基づく区劃整理が推進された（昭和十一年開始、昭和二十四年六月終了）。

昭和二十年には八王子の爆撃を受けた日に、B 29 爆撃機によって熊川駅周辺半径六十メートルぐらいの処が爆撃および焼夷弾を浴びた。

終戦と同時に陸軍施設は全部米軍に接収され、米軍横田基地として再出発した。その後基地は六十ヘクタール追加接収拡大された。

戦後、町には米軍を対象としてのサービス業が急速に増大し、商店街も急速にのび、いわゆる、基地の町として特異な発展を遂げてきた。

また米軍人家族用の家屋の建築も多くなり、その数千七百戸（昭和三五年八月現在）これらのハウスは昭和二十九年から建てられ三十二・三年を最高として、年間二百戸乃至三百戸位ずつ建てられているが、三十四・五年は下火になりつつある。

昭和二十四年六月には町の一部、約四十町歩の区劃整理事業が完了し、字名を変更して、新しく牛浜・志茂・本町と名称を設けた。

昭和二十八年には急激に人口の増加をきたし、西多摩郡の町村では筆頭となった。

二 影

響

1. 農業経営不振から米軍用家屋を建築して一棟二万円から三万円程度の家賃収入へと転向する者が増大し、農地の宅地転用が急激に増大してきた。

2. 米軍横田基地があるため他町村からの勤労者の通勤が多く、したがって昼間人口は西多摩唯一の増加の町である。
3. 商店街が急激に発展し、基地附近に米軍専門の店舗が並び、町の高台には米軍専用の商店と思われる家屋が建築されている。農地の転用は甚だ多く月平均二町歩にも及ぶことがある。
4. 人口については人口の処で述べたように、昭和五年から昭和十五年の十年間に千九百人しか増加していないが、昭和十五年から二十五年の十か年間に約六千七百人、三十五年までの十年間に約六千人が増加した。このように戦後急激に人口が増加したのも特徴的である。
5. 年令別・性別に人口の構成をみても、原則論を破って二十五才から二十九才までの女子が男子より遙かに多いということは注目すべきである。何に基因するかをいうならサービス業その他の職業がこれらの女子を必要としているのではないだろうか。
6. 水田については、戦前より現在の方が若干増えているようであるが、畑については、戦前の四百町歩に近いものが、現在の約二百五十町歩というように、二十年位の間に百五十町歩も減少し、ほとんどが宅地に転用している。山林・原野・雑種地の減少は昭和十四年陸軍整備学校設置による約二百町歩の買収と、終戦直後米軍横田基地として約六十町歩が追加接収されたことによる。従って福生町の農業に大きな変革をもたらしたことはいうまでもない。
7. 一概に基地の影響とばかりとは考えられないが、昭和十年頃は養蚕と紡織工業によって成立していた福生町は、十四年軍事基地が出来てから様相が急転し、三十二年の生産構成を見ると、賃金俸給収入が全体の七四%を占め往年の工業生産にその位置を取って代っている。これはいかにこの町に労務者が多いかと物語っているものである。

また、サービス業の多いのも注目される。

三 利 害

戦後十五年と一口にいうが、日本は勿論のこと福生町においてもいろいろの困難な問題が、山積していた。その中の一つに町の経済と風紀ということについては、町民のひとしく悩みの種であった。藤原審爾氏は、年を追って、当時の様子を簡潔に述べている。福生町においても思いあたるものがあるので、左にこれを引用しつつ、戦後の風紀紊乱の一端を想起してみよう。

昭和二十年八月十七日、内務省、外務省、厚生省、警視庁等の局長会議において、占領軍による治安の乱状を防止するため全国の公娼施設を総動員して、これにあたらせる件が了承された。

九月一日、売春業者、警視庁、勧業銀行、占領軍側等の会合において、同年、進駐予定の占領軍約五十万のため、現存の売春婦約一万三千人のほか、一般より新たに勧誘して計五万人を確保すること、これに対する警視庁側の協力態度等が了承された。

この年は上陸と同時に、日本の婦女子はほとんど強姦、男子は殺戮されるのではないか等デマが盛んに飛んだのに反して、福生進駐の米軍は概して紳士的であった。

昭和二十一年、進駐軍上陸後、三カ月足らずのうち、慰安所のサービス・レディズは、ことごとく性病患者者となった。二十一年より積極的に検診にあたったが、ついに三月、G・H・Qは、将兵の立入を禁止するにいたった。慰安所は「オフ・リミッツ」と掲げ、国民のまえに、その組織を立ち現わした。特飲街ができ、婦女暴行事件等が急増してきた。

昭和二十二年、敗戦後の日本経済の破綻が激化するにつれ、占領政策は根をはり、ようやくそれらの状況の反映が、進駐軍将兵および日本人の意識のうえに現われ始めた。占領という事実について前時代的な解釈しか持たない日本人は、極端な排米事大主義的傾向を示し始め、いわゆる日本ムスメ達は進駐軍将兵との交際の中に、人間の自由を恢復し得る場を、安易に幻想させられるに至った。スベッシュ・メイドが激増し、もちろん、進駐軍将兵は日本のこの貞操プレゼントを当然うける特権者としての自信を深めた。福生町においても蚕室等を改造して、将兵に貸与する家が多くなり、各学校等の廊下を利用しての乱行の跡に顔をそむけるようなこともしばしばあった。普通サラリー、月給三千円ぐらいのとき六畳を五百円位で貸せた。

昭和二十三年、在日進駐軍の集団的な帰国は、二十三年七月、約十五万人の将兵を残し、終了した。これに伴いスベッシュ・メイドは急速に減少し、街娼は競争激化を余儀なくされ、市場を求めて大移動をした。同時に暴力団との結びつきを深め、地域的集団化をもたらし、国民と協力する場を与えられなかった。

昭和二十四年、民間米婦人の来住にともない、一時正常化の方向を示した占領軍将兵の素行は、集団的帰国が一応うちきられると共に、頹廢の傾向を強めてきた。すなわち、それら占領軍将兵の士気調整の手段の一つとして行われた街娼の狩込みは、同年九月、「占領軍と一般日本人との交際は監督すべきであるが、それは占領の諸計画、諸目的を達成するに必要な範囲にとどめるべきである」との趣旨にのっとり、マッカーサーによる占領軍将兵の娯楽場への立入許可、贈答許可等々の発令と相俟って、自ら、異常な性質を帯びざるを得なかった。福生町においても、ここ一・二年街娼婦の風紀問題等について、P・T・A等で教育上困るということが、盛んにいわれ、表面化してきた。この年と思うが、「オフ・リミッツ」といって基地から兵隊を出さない時があった。第一に困ったのは、蚕室等を改良して外人兵に貸していた人達で、また次は商人や特飲街が困った。それで、町議会においても赤線をきめよう

ということになった。元町会議員の某氏の話によると「赤線を分散してはどうか」というような意見も出たそうである。理由としてはいろいろあるが、日本人が経済的に大変困窮していた時に、外国兵が駐留しているということは風紀上種々の難点はあるが、金・物等によって裏づけされる面が非常に多かった。特に煙草・罐詰の転買、衣料品一切・手袋・靴下に至るまで、仲買を専門にする者も現われ、犯罪も大変多かったが、それらによって生活に潤いを持ち、かつそれらをもとに物々交換をする資とすることもできた。

P・T・A・青年団・婦人会・議会は、「町に街娼婦を置かないことに協力してください。」などと、呼びかけて協力これ努めたが、あくまでもこれはゼスチャーであって、一部の者は内面はむしろ歓迎したのではないだろうか、と推察された。

福生における経済というものは、基地に依存することがあまりにも多い。

昭和二十五年、前年来の街娼狩込みにより、街娼はますますその生活のため暴力団との結びつきによる組織を強化し、このことは新たな女性の転落を、一時的に阻止する効果をあげたが、同時に、不完全街娼を急速に増加させていった。いわゆるアルバイト街娼とよばれる形態を形成するに至った。

さらに加えて、朝鮮戦争の勃発は、それにとりまう占領軍の激減は、これら街娼を日ならずして、国民にむかって解放するという新段階をもたらしたのである。

昭和二十六年、朝鮮戦争の勃発は日本を新たに悲運へ落し込んだ。一九五〇年十月に開始された零号作戦（仁川上陸）の歴史的な失敗により、長期戦を余儀なくされた米国は、日本の完全軍事基地化を飛躍的におしすすめた。いわゆる国連軍を併せ、在日占領軍は二十五万を超えるに至り、基地も続続と新設され街娼も三倍強となり、全国では同年七月約十二万五千人という大多数になり、洋娼に依存する生活者を激増させるところとなった。

この年に福生周辺に混血児が百名位いたのではないだろうか。罪のないこれらの子を収容する適当な施設を作ろうという声もあり、多摩川河原に福生ホームなるものができた。

建物はアメリカが作り維持費もアメリカが出した。実際に収容された子供は三十名ぐらいであったようである。福生町からも七・八名収容された。

これが管理の件については、議会で否決され寄附金によって行なっていたようである。

昭和三十年、基地司令官の交代と同時に福生ホームも廃止となり、子供達は里親に連れられてアメリカに渡ったものも相当数あったようである。現在の福生警察の寮が福生ホームのあった場所である。

昭和二十七年十一月、講和条約締結と同時に占領という言葉も進駐という言葉に変えられ、米兵の態度もガラッと上品になった。占領当時のように、むやみやたらに婦女子に飛びかかったり、強姦したり、交通法規を無視したり、バー等における大喧嘩等もだんだん少なくなってきた。町内に住む婦女子の約半数は一度や二度は、身の毛の縮むような恐怖を経験したようである。

また、忘れようとして忘れることの出来ないことの一つに、戦争のどさくさ時、日本兵の残していった什器の処分方法は、適法か否かは知らないが、ガメツイ人々によって適当に処置され、それを取りまくいざこざも各所でおき、富を大にする者、直接が関接かは知らないがそれらが原因で名を遂げる者も出現し、または進駐の物資の処理等で富をなすもの等奇異の様相を呈するに至った。

さて、現状はどうか。福生町はどの程度、基地に依存しているか、この問題は一朝にして簡単に解明できるものではない。町の全力を挙げてでも至難な問題であらう。ましてや一人合点で云々する如きは輕拳というべきであるが、敢えて掲げて、なんらかの資料にしようと考ええるものである。

過日、某部落の P・T・A の子供会が終了してから五人の方と座談をした時の話を総括すると次のようになる（五人の中、男二人は駐留軍要員で三人はハウスメイド・ベビーセットの経験のある方）。

「基地に約どの位の外人がおりますか。」

「よくわからんが、二万人位でしょうか。」

「軍人はどの位ですか。」

「そうですね。兵および関係人で五千人位かね、家族は一万五千人位でしょうか。」

「一人平均どの位手取りになりますかね。」

「多い人も少ない人もあるが、平均すると七・八万円位ですかね。」「十万円位になるかな。」

「福生町にどの程度この金が運転されますかね。」

「そうですね、五割位でしょうか。」

「五割というと、……一人五万として……二億五千万円ということになるかね。」

「一人三万としても一億五千万円か。」

「なるほど、大したものだね。」

「そのほか駐留軍要員が何人います。」早速調べて見ると本町・長沢・永田・加美地区計二四二、熊川地区一五七、牛浜・中福生地区一三五、計五三四（但し昭和三十三年調べ）

「一人平均どの位俸給を取りますかね。」

「二万五千円位でしょう。」

「五百人として計算しても、一千二百五十万円ということになりますか。」

「でも、ハウス千五百戸のうち、福生の人の所有は三、四百戸で、他は、ほとんど他地区の方の所有ときいていきますが……。」

「そうですか、すると、一戸平均月二万としても、二千四百万円位は他へ流れるということになりますか。福生町へは少くも六百万円位にはなりますね。」

「その外基地交付金がありますね。」

「年によって違うが、七百万位としてみましょう。」

「ところで、ハウスメイドというのはどの位いますか。」

「一戸平均一人として五百人位ですかね。そのほか手伝いの方などで七百人位いるでしょう。」

「どの位、俸給を頂きますか。」

「月、九千五百円から一万円です。一日手伝いという時は四百円位頂きます。」

「それからベビーセットとって、外人はクラブとか、東京方面にでかけることが多く、そのとき臨時に子守りに頼まれるんです。」

「昭和三十二年頃から流行する中年婦人の副業によし。」

「それはどの位頂きますか。」

「大体、一時間百円というものです。」

「中年の人で、基地に近い町内の人が頼まれて行っています。外国の婦人は金の外に物もよくくださいます。」

「何かその外、私に教えて頂きますか。」

「そうね、外人の生活は日本人と違って、月給を貰うとどんどん金を使い、まさに月給後一週間は夢の国ということ

ろです。冷蔵庫なども華やかに一杯ですが、月給前の一週間なんていうものは、日本のサラリーの方がよほど生活が楽のようですね。」

「私の驚いたことは、流しで、ぞうきん・ふきんのみさかいなく、洗っていました。ほころび等繕わないし、ボタンなどは安全ピンで、ちょっと止める程度で、もったいないと思うようなものも捨てるし、まさに消耗の国です。」

「ただ、日本人が嫁さんの場合は、経済力があり、貯蓄もしているようです。」

「アメリカに帰国したら少佐以上位でないと女中はおけないそうです。」

「喧嘩など日本と大変かわっていますね。仲裁等入らず徹底的にやりますよ。」

「子供にも平気でおしりを打つし、その打ち方もおしりが熱をもつほどです。」

「日本ではお嫁にやるとき大変金をかけるが、あの気持はわからないと、ある外国人がいていたが、自律主義なんですね。」

「日本の母は子供本位だが、外人は本人本位なのでね。」

話がつきないので次に移ることにする。

つぎに、ある本屋さんと語り合ったことを記す。

「経済依存ということで尋ねますが、思っている通り教えてください。」

「福生町で一番外人依存で、商売が繁昌しているのはどんな店ですか。」

「さあ！ 米人専門の自動車修理工場とか、洗濯屋とか、バーとか、塗料店、赤線の方はよくわかりませんが、駅前通りでは新築しているような家は相当収益があるからするのでしょうかね。」

「その通りでしょう。もう少し具体的に教えて下さい。」

「セトモノ店は高級品が売れるのではないですか。つぎが布地等の洋品店、また肉屋・八百屋では新鮮なよいものを多量に買うでしょう。彼等はそれが主食ですからね。」

「そのほか……」

「そう、雑貨店・金物店、これはハウス関係でね、時計・写真等は関税がかからないし、日本製品が外国に劣らないから売れるでしょう。その他の商店は間接には影響がありますが、大したことはないんじゃないですか。」

その他、基地関係に生花等を教えに行っている方、木工所等で専門に基地に行っている店、理髪・大工・左官商・通訳等、考えると直接・間接相当影響は大であり、商店で全く影響がないというのは考えられない位である。

町を通るハイヤの数も相当多く、晴雨とか曜日、季節によって違うが、三年生の社会科でしらべたものによると六月の晴天の日午前十時から十一時まで一時間に埼玉銀行前をハイヤーだけ百二十台通り、その三割が外人車であった。駅前通りの商店に停車しているハイヤーの大部分は外人車である。夕食のとき子供達と外人の長所について語ったところ、外人の車は日本人の車のようにスピードを出さないし、交差点などでは常によく停車して人を優先させてくれるとか。

福生は他の町村に比して火災が多い。特にハウスの火災が多い。しかし反面、基地と相互援助協定を結んでいるので最新式消防自動車によって大事に至らず消火してくれるとか。

また、学校校庭の整備等には卒先して、然も無償でブルトーザー等を利用してこれが協力に尽してくれているとか、駐留要員等の慰安会等には町民も基地内に入れ親睦にこれつとめているとか、外人は清潔であるとか、その他微笑ましい行為を子供なりに発表してくれた。占領当時は軍服をきてパンパンをつれて歩いていっているものが大多数であったが、駐留軍になってからは、日本人の服装と大差なく、外人同士で歩くものが多くなった。

町に何か行事があったりすると、家族連れで出掛けてくる。三十五年の七夕祭りには、大変な人出で、福生二小の児童による鼓笛隊の演奏を福生一小校庭で施行したとき（二時二五分～三時〇五分）見物人三百人中、男子成人十二人、女子成人十人、子供十人という計三十二人の外人が男女を問わず、成人は写真機をもって撮影していた。駅前通りも午後八時頃は十五人に一人位の割で外人が目立っていた。九時頃には五十人に一人位の割でだんだん少なくなっていた。租借地の観さえある。

七月十日金光の舞踊が福生一小で行われたときも、三十人に一人位の割で外人が見物して拍子をおくっていた。

映画館にしても占領時代は、館内で奇声を挙げるもの、煙草をふかすもの、飲食するもの、パンパンと抱合っているもの、外映を見に行く時は子供を連れていくことは到底できない始末であった。パンパンの服装は一見してわかる真っ赤なオーバーとか、黄色いネッカチーフ、何やら常に口に入れているという姿である。三十五年七月・八月と二回和映を観覧にいったが、そのとき四百人からの観覧者の中に米人を一人をも発見することは出来なかった。安保の問題があったためかも知らないが、これには驚き従業員に尋ねた所、「一日平均十人位ですかね、最も外映のときは三十人位見えますがね。」とのことであった。最近では目も慣れたためか、日本人と大差なく感ずる。

三十五年七月十八日、福生町各学校の混血児調査をした。福生一小男四・女四、福生二小男一・女一、福生三小男三・女一、福生四小男一、中学男一、計十五名である。

混血児の母と約一時間に亘って種々話しあったが、子供を残して主人の除隊と共にこの母はニューヨークに行くという。「女性自身」八月二十四日号は「生み捨てられた天使たちよ」と題して、気の毒な混血児について記述している。また、八月二十一日号の週刊誌「明星」も「あれから十五年混血児たちにも太陽がいっぱい」と題して混血児問題に再び照明をあてている。約七千人または一万人といわれる混血児の今後の問題、今や福生においても中学一年生

を筆頭に十五名も入学している。罪のない彼等が、今後社会に出立つのに、わが子同様すくすくと生育して欲しいと願うものである。

安保の問題も一応けりがついて十年間は何とか基地も継続するとは思うが、その後どうしようとするのか、あまりにも基地にのみ依存していいものか。

三十五年七月十日付福生新聞には、「美人は招く、福生の赤線地帯」と題して次のように広告を出している。

「福生の赤線地帯にはバー七十軒あり、五百人にのぼる美人群は、日本人の来遊を待っている。今までの日本人でここに遊ぶものも数多くあったが、未だ一般に米軍人だけが遊ぶ所だと思っている向も多いので、日本人の来遊をも希望している。このバーはアメリカを対象としているため、そのサービスも垢抜けしているので必ずや御満足して戴ける。」

ハウスの建造も減少になり、また、前記の広告等を通して今後基地による経済依存の見通しの一端が窺われるような気もする。基地の変遷を書き終るにあたり、占領とはこれでよいのだ、文明とはこのようなものなのだと解する人ありとするならば、心あるアメリカ人は頭を下げて、足下に「ノー」と応えるであろう。

と、同じようにわれわれ日本人自ら疚しい所がなかったか、特定の人々にのみその責めを負わせず、自ら反省することがなかったのではなからうか。